

よるのうた（執筆中）

ひゅう

ANDY: I was in here...and in here. That's the beauty of music. They can't get that from you. Haven't you ever felt that way about music?

——Shawshank
Redemption

満月にほど近い、ようよう満たされた月が薄く濁って見える夜、ある小さな村の酒場では、またいつものようにジャズの演奏が聞こえてきた。間もなく日付が変わろうとするにもかかわらず、満席で、皆そろってビールとヴォトカを呑みながら笑っていた。ジャズはピアノを含んだカルテットで、素早く激しい曲を続けて演奏していた。サックスの迷路のようなソロと荒波のようなドラムが入れ替わり立ち代わり競い合い、酒を呑む男たちをより一層酔いの世界へと連れ込んだ。その素早い曲が終わると今度はピアノがまるで電子音の音楽のような無機質なリズムを刻み込む。それにあわせてベースとドラムも電子音のような精緻なタッチでそれぞれの楽器に向き合う。サックスだけが滑らかな美しい旋律を奏でる。それだけで一種異様な音楽になる。ジャズの範疇を遥かに超えた音楽だった。客たちは彼らが奏でるなんとも言えない音楽に酔いしれるのだ。

演奏が終わるといつもより大きな拍手が彼らを覆った。指笛なども飛び交う。

別の曲が始まる。次は静かな曲だった。客たちは演奏を聞くとともに無しに聞きながら、再び笑いを始めた。

喧噪のなか、マスターのエレクは、ワイングラスを丁寧に磨きながら、バンドの演奏を聴いていた。どれだけ注文をこなしてもエレクは演奏に聞き耳をたて、閉店のあとメンバーにチューニングがどうだの、ソロの構成がどうだの、といった文句をつけたり、何曲目かの演奏がすばらしかったことや、誰かの演奏が格段に上達していることなどを耳聡く見つけてはバンドの反省会に参加もしていた。

「おうい、マスター」

どこかから耳慣れた声が出た。入り口で手を振っているヒゲの小太り男が呼んだようだ。

「いらっしゃい」

マスターはなるべく静かに、なるべく彼だけに聞こえるような大ききでその声に答えた。ヒゲの男はずけずけと店の中まで入っていき、カウンターのすみの席にどっかりと荷物を置いて、腰掛けた。

「ひさしぶりだなァ、エレク」

「ああ、半年ぶりか」

ヒゲの男は街から街へ渡り歩く行商人で、名前をグリブといった。

ときどきこの居酒屋にやってきては、一杯やったあと、面白い酒の情報であったり、世界情勢や都会ではやっているものなどの詳しい話をしていき、何日か街に滞在し、いくつかの商売をした後にまた別の街にうつるのだった。

いつものヴォトカをロックで、冷えないうちに一杯目を飲み干し、すぐに別の酒を頼んだ。

「ちょっとまた、良い話がありそうなんだよなァ。聞いてくれるか？」

グリブはもったいつけてそう言うと、上目遣いでエレクを見た。エレクは演奏で、ドラムのロールがうまくいっていないことを確認し、後で告げることを頭に刻みながら、その上目遣いを見

下ろした。

グリブが話したのは、例年に増して今年はワインの当たり年になりそうだとということと、寒波の影響で刺身の高騰が続きそうであること、海外の品不足が通貨に影響を及ぼし、この町にも若干の物価の変化がみられそうであることがわかった、ということだった。とりわけ良い話でもなかったが、マスターは聞くとも無しに聞いて、返事を適当にしながら、新しいワインの研究やグラス加工の工場がある隣町までワイングラスを発注すること、妻のアンナに魚料理を控え、肉や野菜の料理を出すことや、物価高騰に先駆けて腐らない消耗品をいまの間に買い付けておくことなどをぼんやりと考えた。

グリブは話を中途半端に聞いているように見えるマスターに「つれないなァ」とため息まじりに呟きながら、今度はゆっくりと目の前のグラスに手をつけた。

しばらくグリブは黙って、演奏を聞いていた。よく整備されたドラムの音が心地よいと感じた。酔いが回り始めた。

永遠に続くとも思えそうな素晴らしいジャズを聞いている間に夜は一層深まり、客の何人かは健やかに眠りにつき、何人かは巻き舌で息巻いた。